

創立者 井上円了 の魅力

脈々と受け継がれるそのマインド

東洋大学の創立者 井上円了は、「諸学の基礎は哲学にあり」という建学の精神を、思索と実践を重ねて生みだしました。その言葉の意味だけでなく、背景にある熱意や学びの姿勢をも、私たちはしっかり受け継がなければなりません。それらは現代においても新たなチャレンジにきっと活かされるはず



哲学館を生みだした、「哲学する心」

井上円了は、1858(安政5)年、現在の新潟県長岡市にある慈光寺というお寺に生まれました。仏教という伝統宗教に接しつつ、明治維新という近代日本の夜明けを多感な少年時代に体験します。激変する時代の中、円了は漢学と洋学の双方の学問を熱心に学びました。

その後、京都・東本願寺の給費生として東京で学びます。23歳のとき、設立間もない東京大学文学部哲学科にただ1人の1年生として入学します。大学では「西洋哲学」に興味を引かれる一方で、慣れ親しんだ仏教の教えの中に「東洋哲学」を発見。ますます哲学の研究に打ち込んでいき、ついに「哲学が諸学の基礎である」「哲学の研究・普及が国家・社会の文明を発展させるために不可欠である」との考えを固めます。卒業後は独力で学校開設のために奔走し、1887(明治20)年、円了は29歳という若さで私立哲学館を創立しました。

東洋大学の歴史は、ここから始まったのです。

2020年度 学祖祭を挙行

近代日本の新しい教育の扉を開くことに尽力した井上円了は、1919(大正8)年中国・大連での講演中に倒れ、61歳でその生涯を閉じました。102回忌の命日にあたる2020年6月6日、東京都中野区の蓮華寺において学祖祭を挙行。当日は新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐため、例年より規模を縮小して関係者のみで執り行いました。



「井上円了」その人物像とは

本学には基盤教育科目の「哲学・思想」に自校教育の授業があります。受講した多くの学生は「円了先生が、こんなにすごい人とは知らなかった」と驚き、その人間的魅力に引かれていきます。その一端を覗いてみましょう。



◆どんな逆風にも冷静沈着

円了の人生は実はアクシデントの連続でした。のちに円了自身が「三大厄日」と語った事件が以下の3つです。

風災

1889(明治22)年、大型台風が来襲し、完成目前の哲学館の新校舎が倒壊。円了はあわてずに指揮をとり、すぐに工事は再開された。

火災

1896(明治29)年、隣接する中学校より出火し、哲学館の校舎が全焼。ここでも円了は動じず、校舎の新築・移転を行った。

人災

1902(明治35)年、哲学館の倫理学の試験内容と教授法が文部省から不適切とされ、中等教員無試験検定の特典が剥奪された。

どれも大事件ですが、いずれの場合も円了は迅速に行動・対処し、事態を收拾しています。ふだんから冷静沈着で平然と構える、大人物の姿がうかがえます。

◆世界各国、日本全国を歩いた、驚愕の行動力

1888(明治21)年、円了は初めての海外視察に旅立ちます。円了はいまよりも海外旅行が大変な時代に、計3回も世界を視察し、世界中で得た最新の知見をもとに教育を行いました。また、円了は日本全国に哲学を普及し、民衆に教育の機会を届けるため、全国巡回講演(巡講)を実施します。これは生涯教育の先駆けでもありました。記録によると晩年の13年間に5,291回の講演を行い、その聴衆は約140万人。現在の市町村の約60%にその足跡が残されています。



◆妖怪研究のパイオニア

円了は「妖怪博士」としても有名で、漫画家・水木しげるの著書にも紹介されるほど。全国各地に残る迷信・俗信、超常現象などを「妖怪」と呼び、科学的に解明・打破することを目的に、大系的な研究を行ったのです。その成果は『妖怪学講義』としてまとめられ、明治天皇にも奉呈されました。哲学の伝道者として全国巡講を行った円了ですが、この「妖怪学」は人気の演題でした。このように、研究と教育によって「妖怪」を退治してまわった人物でもありました。

